五代目歌舞伎座に思いを寄せて

一九六七年（昭和四十二年）卒

田中 俊雄

三年間じっと我慢していよいよ“歌舞伎座”が新装オープン致しました。

五代目の建物だそうです。しかも全面的な改築は初めてのことです。

外観は殆ど以前の建物と同様に見えます。後にそびえ立つ壁のようなビルを除けば。玄関を入りますと三段程あった階段がなくなりました。所謂バリアフリーです。

一階から三階までエスカレーターが完備致しました。高齢者の方はほっとしたことゝ思います。

着席致しますと、椅子がゆったりしていて、私のような体型の者には非常に有難いことです。膝前も余裕があります。

二階、三階にも上ってみましたが、大向うからも花道の七三がよく見えます。設計された“隈先生”もよく研究されたことゝ拝察致します。音響もライトも見事にでき上っております。（素人が生意気に！！）

さて肝心の演目ですが、客席の制限もあるので三部制は仕方がないことゝは思いますが、柿葺落しのお祝いの初っ端の演目のトリが“熊谷陣屋”ですか？

播磨屋の十八番であり、先代が役者として最後に努められたお役とは言え“熊谷”ですか？

歌舞伎芝居には定番の“お主（しゅう）のために身内の者の首をさし出す”という美談ではありますが、所詮は生首ですよ。お祝いの場所にはどうですかね！！

他に“曽我対面”でも“毛抜”でもいいじゃないですか。華やかな賑やかな演目があるじゃないですか。生首は見たくないですよね！！

結局のところ立役さんが、播磨屋、高麗屋、松嶋屋さんだけなんですね。改めて成田屋、中村屋の抜けた穴の大きさに思い知らされた気が致します。

それに対して女形がそろっているのが余計にくやしいと思います。

一日も早く次世代の立役さん、育って下さい。染五郎、猿之助、橋之助、愛之助、勘九郎、しっかりして下さいよ！！（海老蔵は問題外）

四月の柿葺落公演を見て、つい勝手なことを書きましたが、一人の芝居好きの戯言とお聞き流し下さい。

平成二十五年五月吉日